

西上州

毛無岩一本の新ルート



ボレロ

赤沼正史

西上州に佳き壁あり。吉川栄一氏からきて心踊るのを覚えた。西上州の岩峰群にはぜひ一度手をつけてみたいと思っていたのだ。ましてや、メンツが我が「同人栗と栗鼠」の面々で、「発攀つて、ひと騒ぎやろーぜ」ということならばもう逃がす手はないというものだ。

さて同人の命運を賭けた大狂宴、否遠征はここに幕を開けた。

毛無岩全景、右が鳥帽子直上ルート、左がボレロ



かくして登攀は始まる

第一次攻撃は総勢7名：吉川栄一氏、安田秀巳、山田武、板本恵子それにパンチハーマの元気クライマー、クラブ・ボリニエの小林一弘と、同じ元気山屋の柴原生依さん。1980年11月23日御毛々河原に集つ。アプローチはほとんど寝てない体にはきつい急登を含むもので、所要時間は40分~2時間なり。(個人差あり)

「へ、楽勝だぜ」「もらい！」とかいつつ見上げる壁はなかなかの圧巻ではある。やれ「ぼろい」だ「フロテクションがとれない」だ言つて一方、悩みを知らない小林は「あ、岩登りは危ないよ」の制止を振り切つてさつと登りだす。下で「ヤベーな」とか「死ぬなよ」とかワイワイ言つてる間に小林は「勝負」「セイツ」と元気一杯の孤軍奮闘。

小林を確保するぼくとなりで何とか悩んでぶつぶつ言つてるコアラ安田氏に「ちょっと上がって小林を制

止できますわ」かなんか言つて登り出すが、そこは現場興奮症の烙印を押されたぼくのこと、まして11月とはいえ快晴無風、Tシャツ一枚の快適な攀岩日和。あつさり小林の側に寝返つてルートを伸ばす。結局この日はコアラ氏から借りたボルトまで打ちつくし、4ピッチを登る。あと2~3ピッチで終わりそうだが、腹が減ったのと眠いのとで「あとは明日、皆してかたづけるべ」と下り出す。

夜は当然ながら御毛々河原で「完

登前祝い」の大宴会。ここは静かで、流木にも恵まれたまことによろしい河原である。思うさま酔う。

しかしながら完登予定の翌24日酔眼を覚ましたのはテントを叩く雨音だった。若えーもんはさつさとブイックスロープの回収に行き、「年が明けて暖かくなつたらもっふん来るか」なんて、ちょっと悠長なことをつぶやきつつひきあげる。

1986年 登攀はつづく

何せ忙しい冬だった。あいつぐ忘年会、温泉行、秘かに狙う冬壁の試



ボレロ
作図：安田秀巳

3P目のトラバース、小ハングを越える (V)

ハーケン
ボルト
フレンド

ハーケンボルトは残置

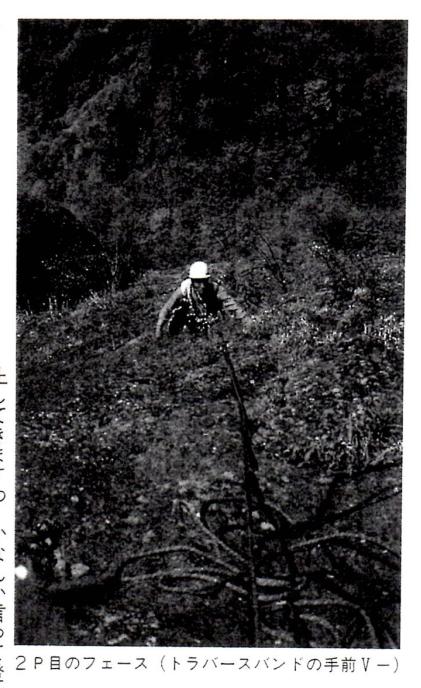
登、ハイキング、水瀑登攀、山スキーハイキング、古寺巡り etc... と無節操にとびまわっているうち、4月の声をきくと誰からともなく毛無岩をかたづけようとの話が高まってきた。

かくして第二次攻撃隊は4月5日、再度御毛々河原に集合した。総勢6名。吉川、コアラ、山田、ぼくの栗と栗鼠メンバー十山猫より参加の井上博之、小林建也の2氏。考えることは皆一緒に、恩田隊長バーイティも独自にルートを作つてゐること。しかし登攀は始まる。ここに我が同人栗と栗鼠の意志の強さが、完膚なきまでに發揮されたわけだ。金貢登頂を目指す今回、6人だらだらとロープにつながつて登る。前回小林が「浅打ちボルトのタイオフ」をフロテクションにより越えた、ボロいボールドは細かい、勝負ピッチ。はあまりにも美しい、ということでお降の際ぼくが発見した草付バンドのトラバースで危険部をあつさりと巻く。ここからは雪のちらつくのをものとせず、フェース、高度感あるトラバースと前回ルートをトレースし、さらにコアラ氏の奮戦で1ピックルートは終了点まで十数メートルを多く、時間切れ、下降。

止できますわ」かなんか言つて登り出すが、そこは現場興奮症の烙印を押されたぼくのこと、まして11月とはいえ快晴無風、Tシャツ一枚の快適な攀岩日和。あつさり小林の側に寝返つてルートを伸ばす。結局この日はコアラ氏から借りたボルトまで打ちつくし、4ピッチを登る。あと2~3ピッチで終わりそうだが、腹が減ったのと眠いのとで「あとは明日、皆してかたづけるべ」と下り出す。

夜は当然ながら御毛々河原で「完登前祝い」の大宴会。ここは静かで、流木にも恵まれたまことによろしい河原である。思うまま酔う。

しかしながら完登予定の翌24日酔眼を覚ましたのはテントを叩く雨音だった。若えーもんはさつさとブイックスロープの回収に行き、「年が明けて暖かくなつたらもっふん来るか」なんて、ちょっと悠長なことをつぶやきつつひきあげる。



2P目のフェース (トラバースバンドの手前V-)